建築士

KENCHIKUSHI

3
2014
March
Vol.63 No.738

特集
「食」の生産施設と地域

小特集：第4回「建築甲子園」審査結果発表

建築士 2014.3 Vol.63 No.738 KENCHIKUSHI

集いの場とひかり
第3回 ミュラー邸／アドルフ・ロース 吉村行雄

2 オピニオン
知・好・楽 日比野 滋
家原のビスタライン 藤口哲夫
少子高齢化先進国日本 瀬田 敦
都市のスカイライン 伊藤麻理

4 北から南から
群馬 建築士会活動は自他共栄のブーメラン 桑原春夫
北海道 高等学校家庭科 住居分野授業への出張講座 工藤美智子
長崎 岩原川プロジェクト 鉄川 遼
三重 「木」を使う―建築士の社会的責任― 中村公一

12 旅から旅絵 第3回
アンタナナリボ 奥村昭雄

54 理事会報告
第7回 定例理事会

57 CPD講座：自習型認定研修の設問

58 News Clip

60 連合会からのお知らせ
2014年度 第8回まちづくり賞の募集

61 平成25年度上半期建築士・建築士事務所登録状況

63 イベント＆新製品

この人に聞く

6 第63回：ミラ・ナカシマ
(George Nakashima Woodworker, S.A. クリエイティブ・ディレクター)

特集：「食」の生産施設と地域

13 特集のことば 北尾靖雅

14 農村の地域形成と建築への期待 三宅 諭

18 畜舎の施設と運用 堂腰 純

22 温室の設計と運用 森山英樹

26 カントリーエレベーター（CE）をはじめとする共乾施設 上方 享

30 北海道の水産物関連施設の設計と運用 小田芳一

34 漁村の地域形成の取り組み 石川 晃
景観まちづくりの観点からの震災復興

小特集：2013年第4回高校生の「建築甲子園」審査結果発表

38 概要・審査結果
審査総評 片山和俊

40 講評 片山和俊・松田悦治・森崎輝行・永井香織・関 伸行
［優勝］徳山工業高等専門学校、［準優勝］山梨県立甲府工業高等学校
［審査委員長特別賞］青森県立青森工業高等学校
［ベスト8］栃木県立真岡工業高等学校、群馬県立前橋工業高等学校
名古屋市立工芸高等学校、明石工業高等専門学校、愛媛県立松山工業高等学校

44 設計コンペ勝利への道 第4回審査風景から 森崎輝行

CPD講座

46 木材コーディネート講座 能口秀一
第7回：木取りと木材価値

50 ［新連載］建築士と技術 松岡治一
第1回：知っておきたい構造の予備知識

本会のCPD認定プログラムはホームページで日々更新しています
http://www.kenchikushikai.or.jp
E-mail：kaishi@kenchikushikai.or.jp

果たして木の国と言えるだろうか？　最近の日本の文化や暮らしから、木が消えて久しい。大都市に暮らし仕事に忙殺されていればなおさらで、あってもまがい物の道具や仕上げの木に囲まれて一日の大半を過ごしていることも多い。戦前、A. レーモンドの下で建築と家具設計に従事し、木の家具をつくり続けたジョージ・ナカシマ。その思想と製作方法を頑なに受け継いできているのが娘のミラさんである。
その工房は、豊かな広葉樹林が広がるペンシルバニアの、深い森や林に囲まれた昔と変わらない環境の中に、現代的な生活や文化を大切にしながら受け継がれている。木の国の人に伝わるDNAを見たような気がした。
聞き手：片山和俊（会誌編集部会長）　通訳：櫻井泰行（国際委員長）

この人に聞く 第63回

ミラ・ナカシマ 氏

George Nakashima Woodworker, S.A.
クリエイティブ・ディレクター

撮影：Bob Krist

●生い立ち

小さくて何も憶えていませんが、私は1942年2月にシアトル市で生まれました。日本との戦争が勃発したために3月にアイダホ州の砂漠の中の日系人強制収容所に入れられ、1年くらい経ってアントニン・レーモンドが保証人となってペンシルベニア州の農場に移ることが許可されました。ですので幼少の頃の最初の記憶はレーモンドの農場生活で、牛や鶏などがいました。当初、父は鶏の世話の仕事をしましたが、難しいので諦めて、家具づくりを始めました。

私の父、ジョージ・ナカシマ（日本名：中島勝寿）は、在米日本人の両親のもとに生まれました。林業を学ぶためにワシントン大学に進みましたが、その後建築を志し、ワシントン大学、マサチューセッツ工科大学で建築を専攻しました。

1934年に来日して、東京のアントニン・レーモンドの事務所で働きました。レーモンドは1921年にF.L. ライトが帝国ホテルを建設する際、一緒に仕事をしました。

父と母は1940年頃東京で出会い、41年にロサンゼルスで結婚し、シアトルで家具をつくり始めました。生活のために建築をしながらの家具づくりでした。その時はメリノール宣教会の宣教師たちが工房を提供してくれて、子どもたちに教えるかわりに工房の道具も使わせてもらいました。戦争が始まり収容所生活になりましたが、そのお陰で日系人の大工さんと知り合い、カンナやノミ、ノコギリなどいろいろな技術を習うことができました。

一方、私はというと、小さい時はいたずらばかりして父の邪魔をしていました（写真1）。大学に入る前は音楽が好きで、フルートとピアノを弾いていました。けれどもハーバード大学に入った時に、父から「建築を勉強しなさい」と言われました。ハーバードでの建築の勉強は自由で、堅苦しい図面を描かず、2次元から始め3次元のデザインに入り、建築史や工学に進みました。ほとんど美術の授業のようでした。

その後日本で勉強したいと思い、父がレーモンド事務所の頃から親しくしていた吉村順三先生に相談したのですが、藝大でもいいけど日本語ができないと学位

写真1：父ジョージ・ナカシマとミラさん。1945年　撮影：Gretchen Van Tassel for War Relocation Authority, ca.

が取れないということでした。先生のところで勉強したかったのですが、学位をもらいたいと思い、論文が英語でもよい早大に決め、1964年に入学、1966年に卒業しました。

●日本で学び、アメリカに帰る

でも、早大で大変苦労しました。4年間設計図面を描いてきた人の中、定規すらちゃんと持てないくらいでしたから。

今井研究室でしたが、最初の2年間は日本語の講義や黒板に書かれた板書についていけず、講義の後に友達が集まって説明してくれました。その後同級生の甘粕哲さんと結婚し、日本人と同じようになれるよう努力しました。銭湯で見知らぬおばあさんが私の背中を流してくれた時には、日本人と思われたのだなと思い、本当に嬉しかったですね。

卒業して66年の夏に米国に帰りました。子どもができたので甘粕さんの仕事を優先し、ピッツバーグで3年間、3人の子育て生活をしました。フリーで日本では翻訳の仕事を、ピッツバーグでは建築の仕事をしましたが、1970年にペンシルバニア州ニューホープに引っ越した時に父の所で働き始めました。28歳のときでした。

父の生存中はいつも手伝いで、父がデザインした家具の図面を描いていました。父の言うことを聞くだけで、自分の言いたいことを言うと怒られました。大変厳しかったです。20年間で何度もクビになりました。侍の気質でしょうか、父方も母方も武家の出だったので、二人とも厳しかったです。ハーバードで学び、考え方を広げていましたから、いろいろな角度から見るとおかしいと思うころがありましたが、父はハーバードの自由な考え方はおかしいと反対していました。

●父ジョージ・ナカシマの家具のつくり方

父は家具をつくる時に、図面は大まかなものを描いていました。建築もそうでした。シンプルに図面を描

写真2：ポカンティコヒルの家（1974年　ニューヨーク州）。
設計は吉村順三、家具はジョージ・ナカシマが担当
撮影：Ezra Stoller ca. 1976

いて大体の形と寸法を決めて、後はつくりながらいろいろなことを決めていきました（図1）。まず木を見て、木と対話し、「木がなりたい形」を掴む感じですね。細かく図面を描く前に、手でいろいろなものをつくる方がいいという考え方がありますが、父はそういう考え方でした（参考1）。

じつは、父のアトリエにはデザインアシスタントをはじめ、木を加工する職人がたくさんいました。亡くなった時に12人くらいいたのですが、世間の人たちは父がすべてをつくっていると思っていたのでしょう。芸術作品のように1個1個、父の手でつくられていると受け取られていて、個人作品だと思う人が多かったと思います。

私が入ってからは寸法も書き入れて、もう少し細かく図面を描いていました。残念ながら、父の図面やスケッチのようなものはあまり残っていません。母が事務所を管理していたのですが、狭い所に入りきらない余計な紙は全部捨ててしまいましたから。むしろ桜製作所（香川県高松市）に、日本で設計した時のものが大事に保管されています。

1964年から1988年までに、父は桜製作所のミングレン（民具連）のワークショップで、8回個展を開催しており、桜製作所は世界で唯一、父のデザインの複製を許可されている会社です。

レーモンド事務所時代に吉村先生が、日本の伝統的な建築のことをよく教えて下さったそうで、いつも大変感謝していました。二人の考え方が似ていたのかも知れません。そしてロックフェラーのポカンティコヒルの家（写真2）を吉村先生が設計された時に、父に家具の依頼がありました。父の時代では一番大きな注文だったと思います。全部自分で木を選び、ラフな図面を描き、細かい図面は私の担当でした。父は毎日毎日工房を回って、直接自分の目で見て、セットしたり直したりしていました。

レーモンドの影響もいろいろなところにありました。東京のレーモンド事務所にいた時の古い日本建築のディテールの本がありますが、それを参考にしていました。現在の私の事務所でも使っています。

●ナカシマ・ウッドワーカー工房の建築

父は建築をやめても、いつまでも建築が好きでした。いろんな形の屋根、構造的に面白いものをつくっていました。この工房の建築は（写真3～6）、私が早大に行く前から始まっていました。中でも難しかったのがコノイド・シェル・ルーフでした（図2）。構造的には成り立っていても、きちんとつくらないと保ちません。アメリカの大工の技術はあまりよくないので、それが父が家具に転向した原因でもありますが。

その後、応接棟、友人であるベン・シャーンの壁画のあるミングレン・ミュージアムなどを建てて、今の姿

図1：Catalog 1958 Chair Drawings
資料提供：Nakashima Studio archives

写真3：深い森の中に点在する工房の建物

写真4：工房内のショールーム

写真5：和風につくられた応接棟の内部

写真6：応接棟のモザイクタイルを貼った埋め込み式浴槽

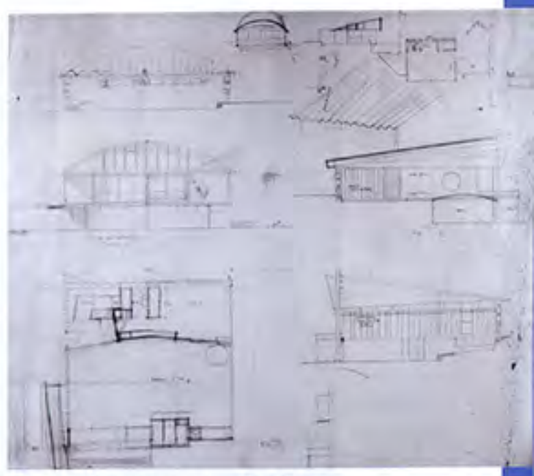

図2：コノイド・シェル・ルーフのスケッチ
資料提供：Nakashima Studio archives

参考1：シンプルなものの美しさ

私たちの家具作りへのアプローチは、日常の暮らし、そして、内から外へと向かう成長力といった直接体験に基づいています。

それは大自然が樹を作り出すときの過程と同じようなものです。更に付け加えるなら、自分が潜在的に持っている素晴らしいものや美しいものを形にしたいという人間の強い願いでしょうか。そこには「メッセージ」もなければ、「デザイン」もなく、自分を強調した表現も、浅薄さもなく、ただ簡素で自然な外観があるだけなのです。

できるだけ普遍的な原則に基づいたデザインは、「スタイル」を超えた作品を作り出し、嘘がなく実用的です。最上の素材が、職人技と呼ぶにはもったいないほどの高度な技術で緻密に形作られていくところには、無駄のない感性が生まれます。優れた手仕事の技術など、ともすれば敬遠される昨今ですが、よりよい製品を作るというためだけではなく、物を作るということ、形になるということの純粋な喜びにおいても私たちはそうした技術を信じています。

できる限り完璧な仕事をし、自然界の廃棄物からでさえ美しいものを作り出す職人技に対する誇りは、素朴ではありますが見直されてもいいことではないかと私たちは思っています。欲望や誇大妄想のはびこる時代において、これは、自分の魂を取り戻すという問題でさえあるのかもしれません。つまり、シンプルなものの美しさを。

（1961年の『ジョージ・ナカシマ・カタログ』の巻頭言より）

写真 7：現在の工房スタッフ

になりました（没後に建てられた貯木棟を除き 13 棟）。

父がつくった最後の建物は 1976 年の応接棟で、内部は京壁、床の間付の和室や、日本から取り寄せた薪で焚く風呂釜にモザイクタイルを貼った曲線の浴槽などがあります。

●工房を引き継いで

1989 年 10 月 6 日に父は脳梗塞になり、左半身が麻痺して図面が描けなくなりました。8 カ月間ほどは、もう正確に図面を描くことができませんでした。その時から私が少しずつはじめから図面を描き、家具づくりのすべての工程を監督していました。父の下で勉強はしてきましたが、ちょっと怖かったです。父には主にプロポーションを直されてきましたが、病気になってからは、逆に私が彼のプロポーションを直しました。なるべく父の仕事の素晴らしさを存続させるために努力したつもりです。

父が亡き後、工房を引き継いで 24 年になります。最初は全く仕事が入ってきませんでした。仕事を自分一人の手で行っている父のイメージがあって、父がいないと何もできないと思われていたのでしょう。3 年間も注文が入らず、どうしようかと思いましたが、自分の顔を出して宣伝して、少しずつ私たちの仕事と私を世間が信頼してくれるようになりました。

現在、工房では非常に細かい図面を描いています。自然木を切断して使う場合、板材一枚一枚のアウトラインを図面化します。日本での展覧会の時も、桜製作所から板材の写真を送ってもらい図面に描き起こしています。第一印象を手でスケッチするのがデザインのイメージを理解するのに役立つ、そういうことと関連しているのでしょう（写真 7～9）。

いま私の工房で働くデザインアシスタントも細かいところまで描きますが、私より細かいところまで考えていても、そのために失敗することもあります。削っていくうちに思った以上に変わってしまうこともあり、寸法を全部変えることも起きるからです。

父は、単純で、直接的で、複雑ではないようにデザインしています。あまり複雑にすると、"ナカシマ"ではないと思っています。

基本的には父がつくったデザインを継承していこうと思っていますが、プロポーションが難しいのです。大体これくらいの寸法でいいとか、厚みと長さを全部よく見て、音楽のように調和すれば一番いいと思っています。

今年新しいデザインをつくった際も、「ジョージ・ナカシマだったら賛成するだろうか？」「賛成しないか？」と考えていました。やはりある程度までいくと、もうジョージ・ナカシマの典型的なデザインにはならないと思います。

写真 8：工房内部

写真 9：スタッフと打ち合わせ中のミラさん

写真 10：家族とともに

写真 11：ジョージ・ナカシマが集めた大量の木材

●工房のこれから

これからのことは後継者問題ですね。今の主人ともう一人とは長年一緒に仕事をしています。けれども木を運んだりしなければならず、他のスタッフは皆若い人たちです。

今まで父も私も建築の勉強をして、建築的な見方で家具をつくってきました。父はもともとアメリカの建築のつくり方に失望し家具をつくり始めました。家具ならスケールが小さくなる分、自分で最初の木から結果までコントロールできて、構造的にも建築的な考えが反映できます。いま、デザインアシスタントは専門がデザインで、木工も大分上手になっていますが、家具を小さな建築と見なした父を思うと、やはり建築的な考え方は必須だと思います。

将来がどうなるかまだわかりません。娘は建築をやっていますが現在はカナダに住んでいますし、二人の息子は医療関係で、日本生まれの長男はビジネス関係です。娘が帰ってくるか、長男が帰ってくるか、またはどちらも帰ってこなくても、何らかの方法を考えていくと思います（写真 10）。

いま、工房にはすごい量の木があります（写真 11）。ほとんど父が集めたものです。ですからいつまでも仕事をし続けなければいけないのです、たぶん、永遠に。

普段の生活に自然の木や、自然の景色は少なくなってきました。人工的な固いものだけを使うと質感が自然とはかけ離れます。やはり、なるべく木を生活の中に取り入れた方が人間にとって自然なことと思います。

本当の木をたくさん見なくても、食卓や部屋に木製品があれば、自然との関係をつくることができます。それが必要だと思います。

※クレジット記載のない写真提供：
George Nakashima Woodworker

ミラ・ナカシマ
1942 年ワシントン州シアトル生まれ。太平洋戦争による日系人強制収容のため、生後間もなくアイダホ州ミニドカ・キャンプに家族とともに抑留される。1943 年ペンシルベニア州バックス郡に移住。1963 年ハーバード大学で建築学学士号、1966 年早稲田大学で建築学修士号を取得。1970 年より George Nakashima Woodworker, S.A. に勤め、2004 年より代表取締役。1990 年より Nakashima Foundation for Peace（ナカシマ平和財団）会長